

知的な障害のある人たちへの支援とソーシャルワーク

西 原 雄次郎*

相模原の事件を通して考える

知的障害者福祉に関わる者にとって、2016年7月26日に神奈川県相模原市で起きた大量殺人事件を素通りすることは出来ない。これについて、筆者はこれまで3本の小さな文章を書いてきた。^{注)}詳しくはそれらを読んで下さるとありがたいが、ここでは以下の三点のみ触れておきたい。

① 知的障害という障害は、誰にとっても無縁のものではなく、誰もが身に負う可能性のある障害であり、身に負う可能性のあった障害である。乳幼児期に多くの人が罹患する麻疹やインフルエンザのウイルスが原因で急性脳症を併発し、そのことが原因で知的障害という後遺症が残る例も珍しくなく、出生前後の事故や乳幼児期に罹患する様々な病気がきっかけで知的障害になる可能性があるのである。

にもかかわらず、知的障害という障害を自分や自分の家族とは無縁だと思っている人たちが少なからず存在し、そのことに疑問を抱かずに、誤解と偏見によってその存在を否定する人がい

て、この事件の犯人もその一人であったと思われる。多数派の人たちは、自分が「健常者」と呼ばれる状況にあることは、偶然の結果であるということを知ってもらいたい。

② 人は誰でも生きる権利があり、他者の生きる権利を否定する権利は誰にもない。

人はどのような状況におかれても、その人なりの人生を楽しみ、その人なりの生活をエンジョイする権利がある。動き回れて、活発に活動できる者が、自分の価値判断だけで他人の人生を評価し、これに対して「生きている意味が無い」等と決めつける権利は誰にもない。これが許される社会は恐怖の社会であるということを肝に銘じておきたい。

③ 「それを言ったらおしまいでしょう」とでも言える種類のことを、心の中で思っているだけではなく、実際に口にし、さらにそれを実行出来てしまう時代の空気が存在しているように思われる。多くの人の中には、自立度の高い人もいれば、低い人もいる。人の世話ができる人もいれば、人からの世話がないと暮らせない人もいる。いろんな人がいる。これが当たり前の人間社会だったはずである。これを否定し、インター

* Nishihara, Yujiro
ルーテル学院大学

ネットを通じて匿名で拡散される無思慮で無責任な意見は、これまでに無かった新しい課題である。「本音」と言われる、動物的な感覚に基づく言動が一部でもてはやされている。

様々な民族や宗教の違いを乗り越えて、大人や子どもや高齢者が、健康な人や病弱な人や障害のある人たちが、共に生き、共に暮らすことができるように、そのために知恵を出し合い、工夫をし、譲り合い、共存のための努力が積み重ねられてきたはずである。

これらの努力の全てを簡単にひっくり返すような言動が、社会を覆い始めているのではないかという恐怖を感じさせられている。

この様な空気が拡散されると、その行き着く先はどの様なことになるのか、それは、二つの世界大戦を通じて人類が学習してきたはずである。目先の利害だけで多くの人は行動するということなのか、それだけ生活に余裕を無くしている人たちの数が増大し、貧富の差が拡大し、一日一日を生きることだけで精一杯という人たちが増えているということなのかも知れない。

知的障害と身体障害

この世にあって多数派を占める「健常者」の多くは、身体障害については理解できるし、想像もできるが、知的障害については理解できないし、想像も難しい障害の一つであるようだ。これは、義務教育段階からの分離教育の結果もあるかも知れない。インクルーシブな教育が幼少期から続けられ、保育・教育関係者による適切なサポートがあれば、これほど深くて広い溝は生まれなかったのではないかと思われる。

筆者が知的障害のある方々と意図的に関わりだしたのは、学生時代のボランティア活動を通してであった。京都 YMCA の少年部の中に、肢体不自由児の療育キャンプを担当するグループがあって（後に京都肢体不自由児協会所属となった）、筆者はそのグループに学生ボランティアの一人として加入していた。夏休みを使って琵琶湖や日本海や宇治川等々で組織キャンプを実施し、その

キャンプの参加者による毎月のグループ活動のサポートなどを担当していた。参加する肢体不自由児の多くは、普通の学校や養護学校（現特別支援学校）に通っている子どもたちであった。

この活動の中で、障害のある子どもたちの中に、キャンプに参加している子どもたちの様には学校に通えていない子どもたちがいるらしいということを知った。ボランティアとしては、キャンプにも来られない子どもたち、学校にも通えていない子ども達にこそ何らかのサービスを届けるべきではないかと皆で話し合った。その結果、就学していなかった知的障害（当時は精神薄弱と呼ばれていた）や重症心身障害のある子ども達の遊び相手になるという活動を開始することになった。

この活動で、筆者が最初に担当することになったのは、京都市内に住む知的障害のある（10歳くらいだったと思われる）女の子だった。彼女は就学猶予か免除の手続きをとっていたのか、学校には通っていなかったが、私との関わりでどんどん文字を覚え、平仮名を読むことができるようになった。

この経験の中で、肢体不自由児と知的障害児との間で、社会の側の対応に大きな差があると思わされた。肢体不自由児の多くは学校に在籍しているのに、知的障害児には学籍もなく放置されている子どもが多くいるのではないかということだった。筆者が遊び相手として通っていた子どもさんのお母様は、とても「世間の目」を気にされているように当時の筆者には思われた。肢体不自由児とその家族も、様々な障壁と格闘しているように思われたが、知的障害児とその家族はそれ以上に高い障壁、分厚い障壁に行く手を阻まれているように、当時の筆者には思えて仕方が無かった。

当時、糸賀一雄氏やその仲間の人たちの活動は、若かった筆者の気持ちを揺さぶるものの一つであった。糸賀氏の講演は全身全霊から絞り出すような熱弁で、知的障害のある人たちや重症心身障害のある人たちの代弁者としての役割を果たしておられたのだと思う。

身体障害者は自分自身で自己主張ができる存在

である。青い芝の会に代表される重い全身性の障害のある人たちの運動が、我が国の障害者施策を大きく変える原動力になったことは誰もが認めることだと思う。

一方、知的障害者は、自分の思いを言語化して人に伝えることにハンディのある人たちである。誰かがその思いを受け止め、代弁者として外に向かって語る役割を引き受けねばならないのだと思う。そのためにも、身体障害者と関わる以上に、知的障害者に関わる者には、当事者の思いを受け止める受信能力に磨きをかけることが求められているのだと思う。発信力にハンディのある人たちが「発信する」ことをしっかり受け止めるために、人一倍の「受信力」が求められているのだと思う。

ソーシャルワーカーはミクロレベルの関わりにこだわる職業人だと思う

さて、ソーシャルワーカーの仕事は言葉を大切にする仕事であると思う。当事者が語られたこと、語ろうとしても言葉にできないこと、錯綜した思いを整理しきれないこと等々をしっかりと受け止める仕事である。待つこと、聴くこと、理解すること、理解したことを伝えること、そして再び待つこと…、を繰り返して、当事者を理解するための努力を重ねる仕事である。

そうだとすると、言葉による発信力にハンディのある知的障害者との間に、ソーシャルワークによる援助は成り立つのだろうか。言葉による発信力にハンディはあっても、言葉以外の様々な方法によって、彼らは彼らなりの様々な思いを表現されるのであり、これをどう受け止めるか、既述のように彼らと関わる者の受信力が問われているのである。

様々な局面で関わりを持つ者たちが知恵を出し合い、「ああでもない」「こうでもない」と、彼や彼女の思いに少しでも近づく努力を重ねることが大切なのである。援助する側のチームワークが求められている。一般の人なら気付かない、素通りしてしまうような細部にも注意を向け、これによって集めた情報を持ち寄り、当事者の言いたい

こと、伝えたいことが何であるのか、見極め、聞き分ける努力が必要なのである。この作業はソーシャルワーク実践そのものであると思うのである。

ソーシャルワーク実践の特徴の一つは、ミクロレベルで当事者と関わり、その生活上の困りの内容をしっかり聴き取り、受け止めることを援助の出発点にすることである。知的障害の人たちと関わる場合も基本は同じである。「聴き取り」「受け止める」ことに、一般の人との関わり以上に細心の注意が必要なことがその特徴と言えるが、基本とするところは同じであると筆者は考えている。

ミクロレベルで当事者としてしっかり関わることを通して、メゾレベル、マクロレベルの課題も見えてくる。ミクロレベルのニーズにしっかりと応答しつつ、そこから見えてきたメゾレベル、マクロレベルの課題に、当事者の代弁者として発言することが期待されるのである。ソーシャルワーカーはミクロレベルの実践にこだわり、それを通してメゾレベル、マクロレベルの課題に気づき、これを社会に向けて発信する役割を担っているのだと思う。

ソーシャルワーカーは、当事者の近くにいて、常にスタンバイしている存在である。いつか使われることを想定して、社会のあちこちに配置されている松葉杖のような存在だと思う。人生の途上で、自力解決が困難な状況に直面したとき、私たちはふとソーシャルワーカーを思い出し、この人に相談し、問題解決というしんどい作業に取り組めるのである。

ルーテル学院での 30 年

筆者は、前田ケイ先生、大谷リツ子先生、岩井道子先生という3人の先生方と運命的な出会いをし、故大塚達雄先生に強く勧められ、1987年4月1日に「日本ルーテル神学大学」に着任した。そして30年が経過した。多くの皆さんに支えられ、多くの皆さんを困惑させ、様々な迷惑も掛けながらの30年だったと思う。

徳善義和先生に引率されて、まだ東ドイツ時代のドイツでの「ルターセミナー」に参加した後、先生方や学生の皆さんと多くの国々を訪問する機会が与えられ、学生の皆さんと一緒に学ぶ機会を得られたのは本学に赴任したおかげだったと思う。

ドイツの強制収容所の跡や、米国の刑務所や裁判所や更生保護施設、韓国への約 20 回におよぶ訪問、フィリピンのミンダナオ島やネグロス島や多くの島々でのホームステイ体験、米国のミネアポリスで G. コノプカ先生からハグされたこと、スウェーデンやデンマークやノルウェーやオーストラリア等々で得た貴重な見聞の機会等々、数え上げたらきりがなが、これらの全てがルーテル学院大学のスタッフになったことで得られた貴重な経験であった。

教員としてはどうだったのだろうか。学生の皆さんや多くの卒業生の皆さんには、残念ながら、良い教師だったとも言えない自分を認めざるを得ない。教授法一つをとっても果たしてどうだったのか。いずれにしても「定年」という制度は、「そろそろ潮時ですよ」ということを自覚させてくれる制度だと思う。

.....

40 歳から 70 歳という 30 年間をルーテル学院大学で働かせていただいたことを、心から感謝いたします。本音で話せる同僚に恵まれました。福祉教育をどの様に展開するか、個々の学生さんの将来を見据えた支援をどうするか、様々なことで深夜まで話し合ったことを思い出します。

ルーテル学院大学の社会福祉教育がこれからも継続し、より良いものへと成長し、福祉現場を支える人々が巣立つ大学、大学院としていっそう飛躍されることを心から願っています。多くの福祉現場にルーテル学院大学の卒業生が働いて下さっています。その力が現場を支える一翼を担って下さっていることに、ただただ感謝です。

ありがとうございました。

(2017 年 2 月 11 日の「最終講義」より)

注

- * 「「本音」について考える」『さぼーと』2016 年 12 月号 54 頁(公財) 日本知的障害者福祉協会
- * 「神奈川県立やまゆり園での事件の報にふれて」『はばただけより』131 号 2 頁 2016 年 9 月 28 日(社福) おおぞら会
- * 「専門職養成における社会福祉の倫理の位置と教育のあり方ー知的障害者支援の現場を中心にー」『社会福祉研究』第 127 号 38 ～ 45 頁、2016 年 10 月(公材) 鉄道弘済会